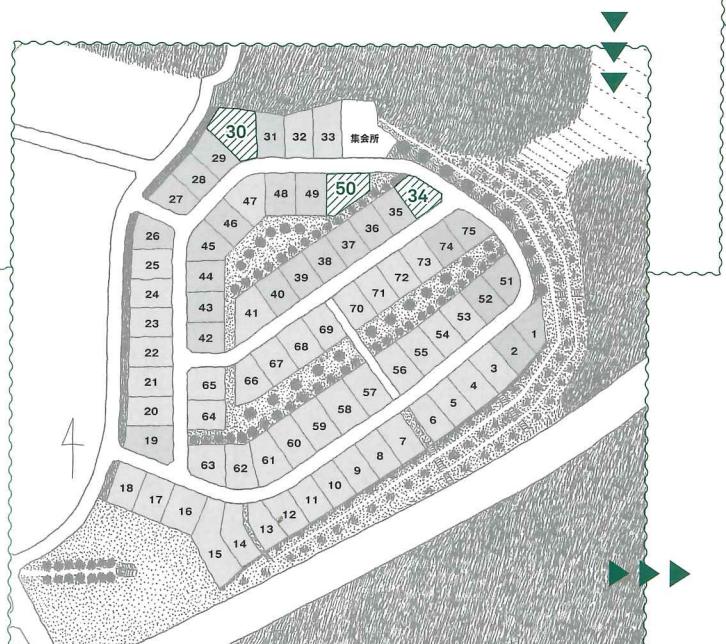




## 平屋が入る敷地を探す

「里山住宅博 in TSUKUBA」に参加することが決まり、柴木材店の平屋のモデルハウスを設計することになった。そこで現地に赴き、東西に4間幅以上の平屋が納まるスペースがとれる敷地を探した。高台に造成された分譲地は、北と東にきれいな山の稜線が望める。遠くには筑波山が見え、景色をうまく取り込めばよい家になるだろう。しかし、ほとんどの敷地は2階建てを想定しているためか、4間幅がようやく入るくらいの広さしかない。75画あるうち、該当するのは3区画（No.30・34・50）のみだった。



step

1

建築家・伊礼智×柴木材店

ふつうに見えて、ふつうじゃない

# 近未来エコハウス

・プランニング編・

2019年6月1日に開幕する期間限定の住宅博覧会「里山住宅博 in TSUKUBA」。会場は茨城県のつくば駅から車で10分、ちょうど中心部と周辺に残された里山との境目に位置する。その自然豊かな分譲地で、21の工務店やグループが、それぞれの強みを生かした里山付き郊外住宅を提案する。

建築家・伊礼智氏と地元工務店、柴木材店が提案する「里山の平屋暮らし」も、その一角に建つ。伊礼氏いわく「併まいはふつうの家だけど、実は数々の新しいことに挑戦している」そうだ。そこで本誌では、プランニング編と完結編の2号に分けて、この住宅を取材する。

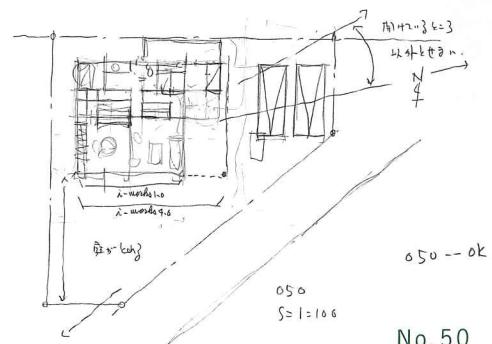
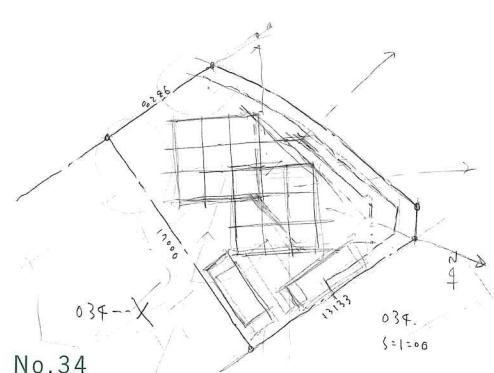
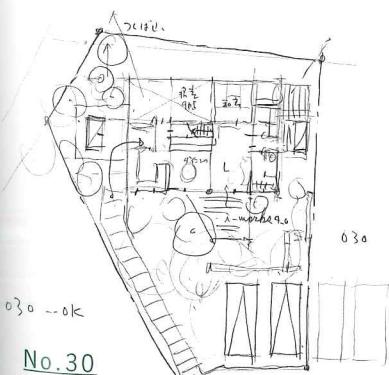
取材・文：編集部

step

2

該当する3区画でプランを検討する

No.30は、北側に抜けしており、筑波山に最も近い敷地。南側道路だが、間口は狭い。また南西方向に建つ隣家のボリュームによって日照が左右される。No.34は、東側に抜けた南側道路の角地。条件はよいが、平屋にしようとすると建物がうまく納まらない。このとき2階建てにすることも頭をよぎるが、平屋に挑戦しようと思いなおし、早々に却下。No.50は、北側道路だが、南側に遊歩道が整備されるため、周囲の緑を取り込み、豊かな南庭をつくれるのが魅力。しかし、モデルハウスという役割を考えると、北側が正面になるのは不利である。道路側の営業的な印象を考慮しながらプランを無理するのもよくないと判断し、却下。最終的に、奥行きがとれ、景色のよいNo.30に決定した。



No.30

No.34

No.50

step

3



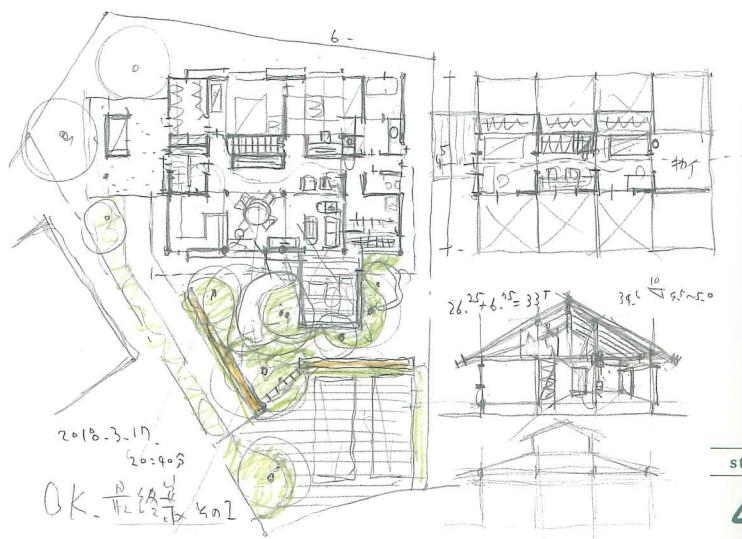
### 北側の眺めに対して 閉じたままではよいのか…？

プランは、2017年に完成したi-works4.0マキタモデルをベースにスタートした。外物置きがあり、玄関を入れるとLDK、その奥に水廻りという構成である。プランとしてはうまく納まっているのだが、せっかく筑波山が望めるのだから、もう少し北側に開いたほうがよいのではないかと考えなおす。

同時に、小屋裏の使い方も検討する。この家では、全館空調+太陽熱利用システムのOMXを採用するため、機械室と各室へのダクト配管用スペースを確保しなければならない。

間口が狭い敷地と、  
まだ見ぬ隣家の存在に悩む

この敷地の難点は、間口が狭いこと。駐車場2台分を確保したら、わずかなスペースが残るのみである。アプローチを敷地の左側に配置し、西入り玄関とした。アプローチが少し長くなることが気になったが、隣に大きな2階建てが建てば、午後の日照に影響してくること、南西側に庭を配置して、庭に開くたびに隣家の壁が目に入ってくるのは避けたいと考え、隣家との距離をとる意味でもアプローチはここがよいと判断した。

step  
4

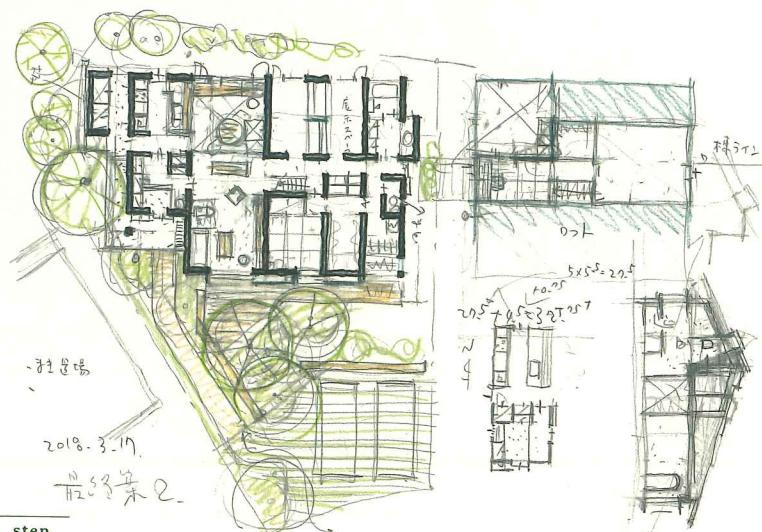
### ダイニングを移動するも 景色が見えない…！

この計画がスタートしたときから、屋根の上にあがって北側の景色を眺める物見台をつくりたいと考えていた。しかし、屋根の上に出るとなれば、開口部の雨仕舞いや耐久性のほか、気密・断熱への対処も必要になる。1階平面計画と並行して、物見台へのアプローチ方法も検討する。

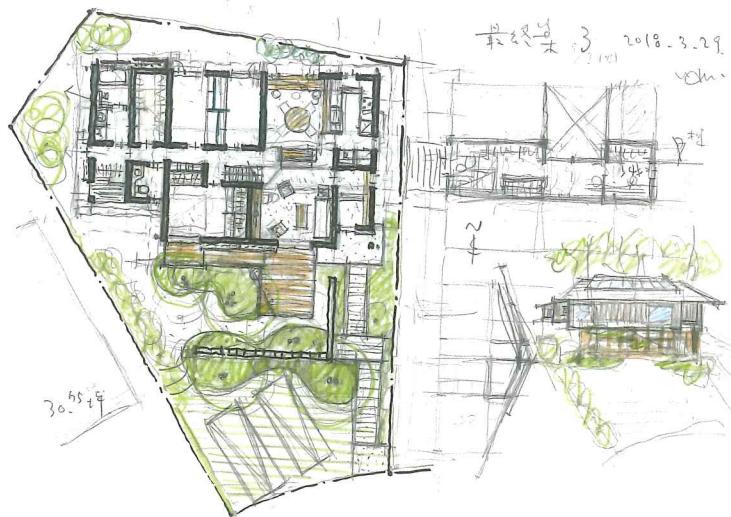
また、北側にダイニングを移動し、大きな窓を設け、南北に抜けるプランに変更する。しかし、再度、現地を訪問し、プランと照らし合わせみると、ダイニングからはちょうど近所の竹やぶが邪魔をして、山を望めないことが発覚する。



隣地に2階建ての模型を置いて、日照を確認

step  
5

アプローチを東側に変更したら  
するするとプランが解ける



step

6

step

7



## 塀を取り払い、家と町の間を 築山と樹木で仕切る

プランが固まったところで、塀を立ててはいけないという、分譲地の規定があることを知る。沖縄の花ブロックで考えていたが、セットバックしていてもNGといわれ、塀をつくらない外構プランを、造園家の荻野寿也さんと一緒に検討する。最終的に駐車場と建物の間に築山をつくり樹木を植え、道路からの視線を遮りつつ、玄関廻りにアプローチデッキを設けて、庭を楽しみながら町とも緩やかにつながるプランで決着する。

物見台へのアプローチは、引違い窓を使って出入りできるようにして、雨仕舞いや断熱・気密の不安を軽減した。風除けに立てた両壁が西

日も遮り、安心して出入りできる物見台になった。さらに、北側に室外機や貯湯タンクを置くスペースをつくり、そこに掃除用具なども置けるようにして、途中でなくなってしまった外物置の代わりとした。さらに、気になっていた南西側の隣家は、平屋であることが分かり、すべてがきれいに着地した。

唯一うまくいかなかったのは、プランが確定してまもなく筑波山だと信じて疑わなかったあの山が、実は筑波連山の支峰の宝筐山だったと発覚し、現場の大工さんたちに大笑いされたことぐらいだろうか。

北側の視線が抜ける場所に合わせて、ダイニングを配置するため、思い切ってプランを反転させる。アプローチは敷地の東側、玄関も東入りとなり、西側は樹木を植えて隣家との心理的な距離をとる。これによって、外物置をあきらめることになるが、南北に抜ける景色と、東西に流れる生活活動線が交差する、魅力的なプランに落ちていた。

東西に走る廊下は909mm幅で少し狭いが、ロフトへ上がるハシゴや収納カウンターを設けて廊下に変化をもたせ、狭さを感じさせない工夫を施している。一方、トイレや洗面室をゆったりさせ、快適に過ごせるようにした。



7

